

大塚先生が福田徳三博士の伝記を書いたとしたら

金沢 幾子
(会友)

大塚金之助先生が、もし、福田徳三博士の伝記を書かれたとしたら、どんな伝記が出来上がったでしょうか。これは全く可能性のなかった話ではありません。

『大塚金之助著作集』第10巻に収録されている1937(昭和12)年5月29日付けの坂西由蔵先生宛の書簡によれば、同年5月、名古屋で開催された福田博士記念学術講演会のあとの懇親会の席上で、福田博士の伝記が問題になり、大塚信行先生より執筆担当者として大塚先生の名が出ました。大塚先生は、自分が日本の政治経済学者(ポリティカル・エコノミスト)のなかで伝記を書くとしたら、福澤諭吉、田口卯吉、福田徳三、河上肇の四人だと思っており、平生この四人の書物や記事をばつばつ集めていること、そして、「もし小生が、一応世界の大経済学者の学説と伝記とを勉強したあとで余生があつて福田伝を書くとしても、福田会員としてでなく、個人として(強調の点を付す)、一学生として書くつもりであります。福田門下や福田会から受ける色々な制約は受けたくありません」とその心構えを坂西先生に伝えています。さらに言葉が続けて、「伝記などを問題とするよりも、日記、未完草稿等々の出版などを言ふよりも、先づその前に準備として、わたたくしは日記、書簡等々の保存(強調点付き)をどうするかの問題こそ急務だと思ひます」と手稿の保存をうたえております。

一橋大学附属図書館に遺された福田徳三博士の手稿類は、現在、中性紙保存ケースに保管され、またデジタル化も進められています。大塚先生の多量な資料類も、「大塚会会報」「大塚会ニュースレター」にたびたび報告されているように、同図書館で着々と整理されており、この点に関して大塚先生は安堵されてよい状況になりました。ただ残念なことに、大塚先生の書簡でふれられている福田博士の日記や書簡は、日本では戦禍のため失われてしまったと聞いております。さいわいなことにドイツ連邦公文書館(コブレンツ)に、福田徳三が恩師ルーヨ・ブレンターノに宛てた独文の書簡が所蔵されていることを早島瑛関西学院大学教授が教えて下さり、西澤保一橋大学経済研究所教授がその複写物を取り寄せることができました。さらに西澤先生は、院生の柳沢のどかさんに手書き書簡の翻刻と翻訳を依頼し、それを校閲、註を添えて2006年3月に『福田徳三・ルーヨ・ブレンターノ書簡 1898-1931年』(一橋大学社会科学古典資料センター Study series no.56)を刊行されました。

伝記のこともどりますと、大塚先生は『福田徳三博士追憶論文集 経済学研究』に掲載する予定で、「ルーヨ・ブレンターノ教授の生涯：教授の自叙伝を読

みて」を執筆、福田博士の恩師であるブレンターノ博士について、かなり批判的に論述しました。この論文は、大塚先生の逮捕をきっかけとして未掲載となり、大塚先生は「公表されずほむらる」と追記しましたが、大塚先生の批判が『追憶論文集』の編集者たちの意向に沿わなかったこともその一因と思われます。一学究としての鋭い批判的な態度は、おそらく福田博士の伝記を書く場合にも貫かれたことは想像に難くありません。それは、また、大塚先生の坂西先生宛書簡の言葉を借りれば、福田門下が福田先生から引き去った「社会」を書きこんだ伝記に仕立てたのではないかと思われます。

そうして出来上がった大塚先生による福田博士の伝記を、また、現在は『大塚金之助著作集』第2巻に収録されている「ルーヨ・ブレンターノ教授の生涯」をも、福田博士が目を通されたらどんな反応を示されるでしょうか。高島善哉先生が当時福田博士が心酔していたリーフマンを批判したときのように激怒されるでしょうか。それとも「学問に師なし弟子なし」をモットーとしていた博士は大いに喜ばれたでしょうか。大塚先生の卒論「村落団体ニ関スル学説ノ研究」は、共同体に関する研究の立場が福田博士と大塚先生とは異なっていました。博士は大塚論文を「二十余年の間に、私が見ることを得た数十の卒業論文中、殆んど類を絶する底の力作である」と激賞しました。また、高島先生が助手論文に添えて提出したマルクスの『剰余価値学説史』上巻の翻訳は「非常にグッドだ」と褒めたと伝えられています。私は、福田博士は一知半解な批判を加えることは許さなけれども、大塚先生がそのような態度で執筆されるはずもなく、ブレンターノ批判も、大塚先生がコソコソと集めた資料をもとに検証して書きあげた福田博士の伝記 — その生涯についても、その業績についても — 喜んで受け容れたのではないかと思ひます。

大塚先生がお亡くなりになる三カ月ほど前、福田徳三と大正デモクラシーとのかかわりについて手紙を差し上げていた渋谷輝二郎氏は、大塚先生から「福田先生は大きな人で、いろいろな角度からみることができる。先生は昭和の最初の総選挙で当時の最左翼の労農党を支援した。私は先生のお伴をして藤森成吉の応援演説に行った。先生はいろいろの見方をされているが、それは群盲が象をなでるようなもので、シツポだけでしよう。」という意味合いのことを電話口で受け取ったことを記しています。(「死ぬ準備 - 故大塚金之助先生のこと」：『如水会々報』no.647: 1984.3)

私は『福田徳三書誌』をまとめるにあたり、無味乾燥になりやすい書誌を読める書誌にしたい — 生きた経済学を目ざし、生涯をかけて人々の厚生生活の向上を望んで、国内外に一学徒、学者、教師として活躍しながらも、良くも悪くも江戸っ子気質が顔を出してしまふ、福田博士の生き活きとした姿を伝えることが出来たら — という思いで作業を進めてきました。以下宣伝になってしまいま

すが、内容を紹介しますと、
書誌は、Ⅰ．年譜関係（年譜書誌、人名・団体名索引）、Ⅱ．著作関係（著作年譜、著作の内容目次、論題索引、論争・批判索引）、Ⅲ．関連リスト（講演・演説リスト、著作の掲載誌・紙リスト、献呈本リスト、福田による書評・紹介リスト、福田の著作に関する書評・紹介リスト）、Ⅳ．福田について書かれた文献（被伝書誌）に分けて記載しました。

その特徴をいくつかあげますと、年譜については、福田本人の日記が見当たらないことから、同時代人の関一、吉野作造、堀江帰一、上田貞次郎、小泉信三、河合栄治郎、木佐木勝の日記を参考にしました。（余談になりますが、引用は多くはなかったものの、河合の日記では、東京大学経済学部が社会政策担当者として福田に依頼しなかった事情や、河合の福田著作についての読後感、中央公論社の若い編集者・木佐木の日記では、「中央公論」と「改造」の対比や、大正時代の思潮衰退の流れを鋭く感じ取った箇所などを、おもしろく読んだことでした。『上田貞次郎伝』では、上田博士と福田博士との関係について、時代背景を視野に入れた、冷静かつ率直な上田正一氏の分析にも敬服しました）。また、できるかぎりその記事情報の典拠を記載し、利用者がその文献にたどれるように心がけました。

著作年譜では、同時代人の書評や批判をあげるとともに、後世の研究情報を掲載し、その論文の一部を引用することによって、福田の著作の概要や特色を伝えるとともに、参考文献としての研究書の案内をかねるようにはしました。

関連リストの中の献呈本リストでは、大阪市立大学学術総合センター所蔵の福田文庫を二回にわたって調査した結果を載せました。二度目の調査では、杉岳志一橋大学附属図書館専門助手に同行していただきました。杉さんには調査の協力以外にも達筆な献呈の辞や書簡の読みやすい文字の解読を何度もお願いしました。献呈の辞や書簡にはそれぞれの個性や学友・師弟関係をのぞかせるものもあり、福田博士と当時の学者の交流を浮かび上がらせました。私の調査対象は、和書のそれも社会科学分野を中心としたものでしたが、和書以外に孫文からの献呈本や、とく子夫人が書いたものと思われる入院中の時期の献立表を見つたりもしました。

索引としては、論題から著作書誌と、その背景である年譜書誌と、そのどちらからともたどれるような関連索引に労力をかけました。

福田について書かれた文献（被伝書誌）には、福田と論争や批判をした著作のものとにマークをつけ、論争や批判の要旨も添えました。

最後に、書誌作りにかかわってきた図書館員の思いとして、福田博士が文献を重視したこと、目録や索引の必要性を訴えていたこと、図書館ひいきであったことについて取り上げ、世界の名著アンケート、蔵書収集と献呈本、図書館と目録、索引ほか月報、しろうとの歴史などのテーマで、日本経済評論社の「評論」に載

せたような短文をおわりの挨拶代りにしました。

書誌作りにあたっては、今は亡き杉原四郎先生、山田雄三先生のご指導をいただきました。西澤先生からは調査上の便宜などのご援助をいただきました。また大塚会の戸塚様からときどき福田関係情報をお寄せいただきましたが、天野敬太郎氏の『法政・経済・社会論文総覧』や『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所雑誌目次総覧』（大空社）などの先行書誌があったこと、各図書館や図書館員の協力によってこそ成り立ったものと感謝がつのるばかりです。

私の書誌は、大塚先生の言葉にもありましたとおり、福田博士の一部を伝えるものにすぎず、調査不足も多々あります。刊行は秋の予定で、ページ数も多く、発行部数も少ないことから値段がはりますが、会員の皆さまにはお目とおし下さいますよう、そして、新たな情報や、間違いの指摘をお寄せ下さいませようお願い申し上げます。

編集委員会注) 版元ドットコム(<http://www.hanmoto.com/bd/isbn978-4-8188-2168-2.html>)に下記案内が出ておりましたので、ご参考までに。[accessed 2011.07.28].

福田徳三書誌

金沢幾子編／発行：日本経済評論社／B5／1100p.／予価：25,000円
福田徳三(1874～1930年)。明治末から昭和初期にかけて近代経済学の批判的紹介、マルクス経済学批判、社会政策、経済政策論で活躍。日本社会政策学会の代表的論客。マルクス経済学をめぐる河上肇との論争は有名。高等商業学校（現一橋大学）に学び、ドイツに留学。ブレントノー教授の指導を受け、帰国後母校や慶應義塾などに教鞭をとり、左右田喜一郎や小泉信三ほか錚々たる人材を育てた。

目次

- I. 年譜関係
 - 1) 年譜 2) 人名・団体名索引
- II. 著作関係
 - 1) 著作年譜 2) 著作の内容目次 3) 論題索引（付：年譜関連索引）
 - 4) 論争・批判索引
- III. 関連リスト
 - 1) 講演・演説リスト 2) 著作の掲載誌紙リスト 3) 献呈本リスト
 - 4) 門下生リスト 5) 福田徳三による書評・紹介リスト 6) 福田徳三の著作に関する書評・紹介リスト
- IV. 福田徳三について書かれた文献（被伝書誌）